

## 安全の持つ大切な2つの性質

安全には、大切な2つの性質・特徴があります。一つは「事後性」、もう一つは「総合性」です。

「事後性」とは、後になってから大切さがわかる、起きてしまってからくやまれる、という性質です。安全に関わる事からは、何も起きずにいる間は、空気のようにその重要性もありがたみもあまり実感できません。しかし、不幸にして、ひとたび災害、事故、あるいは事件が起きてしまって、事後の時点から振り返ると、その大切さや対策の重要性がよくわかります。

このことは、大変重要な事実を示しています。それは、災害・事故・事件には、だれも夢想だにしていなかったようなこと（「想定外」）は、実際には、あまり存在しないという事実です。だからこそ、いったん起きてしまえば、つまり事後的には、そうしたことが起こってしまうだけの〈原因〉（たとえば、油断や慢心、対策の不備など）がそれなりにあったと、だれにも思えてくるのです。

よって、安全の確保は、いかにして、この「事後性」というバリアを克服するかにかかってきます。「事後」ではなく「事前」に、〈原因〉にアプローチしそれを摘み取ってしまうためには、どうすればいいのでしょうか。簡単なことではなく、絶対的な切り札があるわけでもありません。しかし、まったく手が無いわけでもありません。

有力な方法の一つは、すでに「事後」の立場にある方々、すなわち、不幸にして、災害・事故・事件に巻き込まれてしまった方々の声に真摯に耳を傾けることです。この「安全教育プログラム」には、こうした作業や学びを進めるための手法、ツール、プログラムなどが数多く紹介されています。十分にご活用いただきたいと思えます。

もう一つの性質、「総合性」とは、安全の問題は、本来、自然災害に対する安全、交通事故に対する安全、犯罪等に対する安全など、個々バラバラにあるわけではないということです。二つの意味で、そのように言えます。

まず、しばしば指摘されるように、安全の確保には、「敵を知る、己を知る」、この両面のバランス（総合）が重要です。たとえば、津波防災の場合、自分が暮らす地域にどのくらいの大きさの津波が、どの程度の速さでやってくるのか知っておくことが、敵を知ることにあたります。他方で、自分はどの避難場所に逃げるのか、そこまで何分かかるのか。そういったことを、訓練を通してチェックし体感しておくことが、己を知ることです。交通安全の場合でも、同様です。クルマや道路の性質について知ることと同時に、運転者あるいは歩行者としての自分をもつ欠点・短所にも目を向けることが大切です。

このとき、敵については、多様な敵に応じた多様な対策が必要となっても、己の方については、多くの場合、共通した総合的なものになるケースがほとんどです。総合的な安全マインド、安全文化のようなものがあるからです。たとえば、津波・地震防災には熱心だけど、気象災害には何の関心もないという人は少ないでしょう。あるいは、不審者対策など生活安全に熱心な学校・地域は、交通安全にも力を入れているものです。

次に、一見バラバラに見える敵のサイドも、実は相互に関連しあっているという意味でも、「総合性」は重要です。たとえば、津波は、もちろん地震に伴って起きます（稀に例外がありますが）。地震による揺れで土砂災害が起きて、想定していた避難場所へと至る道が崩れているかもしれません。また、こうした土砂災害は、冬期のように雨が少ない時期よりも、大雨が続く梅雨期や台風襲来後に地震が起きた場合の方が多く発生するでしょう。すべては「総合」的で、関連しあっています。

他方で、生活安全の取り組みで培った声かけの活動が津波時の避難の呼びかけにつながったり、交通安全の知識が、自転車での避難に役立ったりなど、よい意味での「総合性」が発揮されることも、もちろんあるでしょう。

「安全教育プログラム」では、便宜的に、「震災編」、「気象災害編」、「交通安全編」、「生活安全編」と分けて記述がなされています。しかし、以上のように、安全の問題は、本来「総合」的なものです。ですから、たとえば、地域社会を襲う津波をテーマにした防災学習がそのまま社会科の学習にもなりうるし、雨天時の交通安全を考える学習の中で気象災害に対する備えについて触れることもできるでしょう。

そのような総合的な視点をもって本冊子に目を通し、安全教育の現場で役立てていただければ幸いです。

高知県安全教育プログラム策定委員会 委員長  
矢守 克也  
(京都大学 防災研究所巨大災害研究センター 教授)